マヨイガ　子犬、拾いました。

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マヨイガ　子犬、拾いました。

【Ｎコード】
Ｎ２８１４Ｗ

【作者名】
碧

【あらすじ】
短編　マヨイガの続きです。

前編（前書き）

治那さまの感想にテンションあがって書いてしまいました。治那さま素敵なネタをありがとうございます！！早く続きをお届けできるようにがんばります！！

前編

迷い家、それは山奥深くに迷い込んだ者が希に見つける立派なお屋敷。屋敷の庭は綺麗に整えられ、牛や鶏などが飼育され、屋敷の中は清潔に保たれ、火鉢の火はついたまま、囲炉裏には沸いたばかりのお湯、台所にいけば出来立ての食事の数々。人がついさっきまでいたような痕跡があるのに、呼びかけても誰の姿も見つけられない。迷い込んだ者はしばしの休息をとった後、その家からたった一つだけものを持ち出すことができ、それは幸運を呼び込むという。

そんな迷い家でありながら人間恐怖症となり人を招くことのできなくなった迷い家がこのお話の主人公である。

「はぁはぁ……」

怖い。怖い。怖い怖い！

逃げても逃げてもすぐ側まで追いつかれているような強迫観念に彼は何度も何度も後ろを振り返り追っ手の姿がないことを確認せずにはいられなかった。

なんで、あんなのに目をつけられたんだろう？

考えれば考えるほどわけがわからない。

ただ、自分はひっそりと目立たないように暮らしていたのに。

「に、げ、なきゃ」

ただそれだけを思って走り続けた彼の前が突如開ける。

「はぁ、はぁ、えっ？」

いつのまに発生していた霧のなかでひっそりと現れた立派な日本家屋に彼は呆然とし、そして急速に意識を失った。

「人をま～ね～き～な～さ～い～～～～～～！！」

『い～や～だ～～～～～～～！！』

今日も今日とて懲りずに説教かます金髪美少女とそれに反発しまくる立派な日本家屋（の迷い家という名の人外）。

『いやったら嫌！！人間怖い！！絶対に招かない！！びばっ！お一人様生活！！』

「お馬鹿！！だからそれはただの家！！廃墟だっていっているでしょう！！」

『廃墟いうなぁぁぁぁぁ！！！わたし達にとってそれ、禁句！！あんたも迷い家ならどれだけ言われるのが嫌かわかるでしょう！！」

迷い家の言葉に同胞たる少女ははん！と馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「馬鹿ですわね。わかりきっているからこそあえて言っているに決まっていますでしょ？」

『確信犯かぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！性質が悪いよあんた！！』

迷い家の怒りが頂点に達したその時。

「『………っ！！』」

少女と迷い家はその気配に同時に気づいた。人を招く、その迷い家としての本能が近づいてくるその気配を敏感に感じ取っていた。

「これは………」

『ひっ………』

「うん？」

『人ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ～～～～～～～～～～～～～！！！！！？？？？？？』

怖くて仕方のない人の気配に驚愕状態の叫びをあげた迷い家。少女は冷静に扇を開き口元を隠した。

「そうね。人がいるわ」

『なんで！！どうして！！人の気配はしなかったのに！！』

「そうね、突然現れたわね。わたくしにもよくわからないですわ。でも………」

ちらりと横目で見てくる少女は確実に「さぁ、招け。いざ、招け。

なんでもいいから招け」とおどし……いや、促していた。
いやだ。突然現れた気配を人嫌いを抜きにしても怪しくて招きたくない。
家の中でどんな暴挙にでられるやら分かったもんじゃない。
だから当然迷い家は拒否するのだが……。

『い、いや……！』

「……なんですって？」

『い、いやったら……い……』

「な・ん・で・す・っ・て？」

『うっ……』

迷い家よりも永く生き、性格的にも迫力も圧倒的に上の同胞に何気に押され気味になってしまう。

『うっうぅぅぅぅぅぅぅぅ！！』

「というかせっかくわたくしが時間を稼いであげていますのになぜ入って来ませんの！！」

『！！ああ～～～しまった！！』

迷い家は基本的に家にたどり着いた人間が入ってくるのを阻止できない上に、自主的に出て行くまで追い出すこともできない。
本能に根付いたそれを利用した少女の作戦はたどり着いた人間がいつまでたっても入ってこないことで破綻してしまった。

「まったく！！入れば最高級のおもてなし（するのは人恐怖症な迷い家）するというのに何を戸惑う必要があるのです！！」

自分の家でもないのに言いたい放題である。この分では手は出さずとも口は盛大に出しそうな勢いである。

『あ～～～ちょ！やめてやめて！！せっかく入ってこないんだからこのまま帰ってもらおうよ！！』

「阿呆ですか！！あなたがいつもいつも迷った段階で助けてしまうから迷い家までたどり着ける人間は皆無だったのですよ！！か・い・む！！この奇跡のような契機を逃す手はありませんわ！！」

ずんずんと玄関に向かう同胞に迷い家はおろおろと引き止めるが口以外に止める手立てがないため無視されて終わりであった。

『ど、どう？いる？いるの？まだいるの？ねぇ、答えてよ！』

怖くて意識を人間が居るであろう方向に向けられない迷い家に少女は一切省みなかった。

びくびくおどおどと玄関を開け外を確認している少女の背中を窺う迷い家。

迷い家が知覚しているのは少女の背中のみ。普段なら己の敷地内のことなら全て知覚できるのだが恐怖のあまり外の知覚を一切遮断していた。

「ふぅ……そんなに気になるなら自分の目で確かめなさいな」

『え、いやっ！怖い！』

「……」

にっこり笑うなり少女は玄関の壁に手を突っ込む。壁に当たるはずの少女の手はまるで泥に沈むように壁の中に消えた。何をしようとしているのか瞬時に察した迷い家は身構えるが相手の方が早い。

『……っ！きゃん！』

ぶるるっと家全体が何かに抵抗するように大きく揺れる。少女の腕が何かを引っつかんで思いっきり壁から引っ張りだした。

「いたぁい……！」

どすんっ！床に転がり出たのは黒髪おかっぱに赤い椿の柄の着物を着た十歳前後の女の子。転がり出たときに頭でも打ったのか涙目で後頭部を撫でていた。

「あら？なんで縮んだ姿ですの？」

「あんたが無理やり引っ張りだしたからよ！！」

可愛らしい怒声が響く。

無理やり引っ張りだした迷い家の分身が想像した姿より幼い姿だったため少女が不思議そうに首を傾げるのを幼子……己の意思ではなく他者に無理やり具現化させられたため幼い姿……である迷い家の分身が座り込んだまま指差して突っ込んだ。

「う～～ん。その姿では迷い家というよりかは座敷童のようですわ

ね。早くいつもの姿になってくださいな」

「自分が原因だって自覚ある！」

プリプリと怒りながら迷い家は姿を変える。その姿が一瞬だけブレ、そして……。

「あれ？」

変わらず十歳児の迷い家。何度姿を変えようとしても一瞬だけブレるだけで姿は子供まま。

たらりと迷い家の頬を汗が流れた。

「も、戻れない……なんで？」

ならばと本体に戻ろうとするがこちらも失敗。

流れる汗はいまや滝のように大量で氷のように冷たかった。

ぎ、ぎぎっと硬い表情を見せる迷い家に同胞兼原因である少女は

「……てへ★」

可愛らしく舌を出して自分の頭を軽く叩いて見せた。

「てへ★で済むかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

「そんなことよりもこの人間早く家に入れてあげないといけませんわね」

「わたしの一大事をそんなことの一言ですますなぁぁぁぁぁ！！」

「はいはい。あ、そっち持って」

「え、あ、おもっ！」

怒声を軽くいなされ気づかないうちに気絶した少年を運び込む手伝いをさせられた迷い家がうっかり自分から人間を招きいれた形になったことに気づくのは少年を寝かしつけ、彼のためにあれやこれやと世話を焼き、妖怪仲間で医学の心得がある者を呼んで診察をしてもらい少年に命の別状はないときいて一息ついた時であった。

「はっ！人間を自ら招きいれた！！」

「今頃気づいたのですの？」

……その一言に迷い家は深く落ち込んだ。ついでにいえば本体に戻れなくなったことや十歳児の姿から変われないことなどは彼女の頭に残っていない。

迷い家は難しいことは同時に考えられない単純……いやいや器用な性格ではなかったのであった。

中篇

ふわりと優しい気配がした。
柔らかな手が自分の額に添えられるのを夢現に感じて少年は薄っすら笑った。

「おかあ、さん……」

優しく汗をぬぐってくれる手を母だと疑わずそう呟く。額に乗せられた手が一瞬だけ震え、少し迷うように髪を撫でてくれた。

「大丈夫、もう、大丈夫だから」

戸惑うような声はそれでも精一杯自分を励まそうとしているように聞こえた。記憶にある母の声よりもずいぶんと幼く感じたが朦朧とした意識はさしてそれを疑問とも思わず幸せにへにゃりと顔が緩んだ。

「うん、こわいひとに追いかけられたんだけど……おかあさんがいいるならあれは夢、だったんだね」

思い出すのも恐ろしい夢だった。容赦なく自分を追い掛け回した異国の青年の姿に身体が無意識の内に震えるのを少年は止められなかった。

「えっと……怖い人はここには入ってこれないから……その、安心していいよ」

その声に少年の意識は再び夢に落ちていく。心から安心しきった顔

で眠る少年に「おやすみなさい」という優しい声が聞こえていたかはわからなかった。

すうすうと健やかな寝息を立てる人間の姿に枕元に座った迷い家は困ったような怯えたような複雑怪奇な表情を浮かべた。

やせた手足に小さな身体。ほんの少しだけ色素の薄い黒髪に眠っていても分かる整った顔立ちはどちらかといえば綺麗より可愛い。迷い家の前にいき倒れていた少年は年のころは今の迷い家の姿より三歳ぐらい上に見える。

『おかあさん』

そう言って笑った少年はただただ無邪気に親の愛情を求める子供にしか見えなかった。

怖い人間なはずなのについつい慰めるようなことを言って、髪を撫でてしまうぐらいに頼りなさげに見えた。

人間は怖い。それは変わらない。だけどこの少年を無碍にすることはできない自分を迷い家は自覚していた。

怖がっていても弱った子供に冷たくできるほど迷い家は性格悪くなれなかったのだ。

そうとう衰弱していたのだろうそれから少年は昏々と眠り続け、目覚める気配はない。迷い家は汗をぬぐったり契約している小人や精霊に頼んで服を着替えさせてもらったりと人の姿でバタバタと忙しくしていた。

趣味が高じて昔人間の医者に弟子入りしたという変り者の河童は「

寝るだけ寝たら起きる！」と断言していたがこうも眠り続けると心配になってくる。
十歳児の姿なのにも関わらず「嫁にならんか？」と言ってくる河童の尻をけりとば……ごほん。丁重にお帰りいただいた迷い家は「ふぅ」とため息をついた。

本体に戻れなくなったとはいえ迷い家の全ては知覚できている。今も契約しているツクモ神や小人・精霊などが家の手入れなどをしてくれているのが感じられる。
下は手のひら。上は人間の五歳児ぐらいの大きさの彼らは総して使役鬼と呼ばれ迷い家に安全で住み心地のよい住処を提供してもらう代わりに迷い家の環境整備を請け負う。

ちなみに原因たる同胞は『「家」をいつまでも留守にしとけないから帰りますわ～～～おほほほほ後は二人でごゆっくり～～～～！！』とまるで見合いの仲人のような言葉を残して逃げた。

『あるじさま！ふろそうじおわりました！』

『わたしもにわのくさむしりしゅうりょ～～しました！』

『あるじさま、おなかすいた』

『おれも』

『わたしも』

「「「「ごはん～～～～！！」」」」

使役鬼達が大合唱しつつわらわらと現れ迷い家の裾を引っ張る。

小さい者達はきゃきゃと笑いながら迷い家の髪や着物にぶら下がり、それ以外の者達も笑いながら迷い家の手を引き一向は台所へと向かった。
慣れた手つきで料理をする迷い家の足元で小さな小人が竈の火を起こし、違う精霊が芋を洗い、ツクモ神が鍋をかき回す。
わーきゃーと騒ぎなんとも賑やかな台所だ。人間恐怖症になってからめっきり人の姿を取らなくなった主の久しぶりの人の姿に彼らは一様にはしゃいでいた。
もちろん家の姿も大好きだが自分達が抱きつけたり手を引っ張ったりできるこちらの姿も皆大好きなのだ。

『あるじさま！！味噌いれたよ～～～～』

『ご飯、ふきこぼれたぁぁぁぁ～～～～！！』

『あ、しょっきがぁぁぁぁ！！』

賑やか過ぎる……だが、それが迷い家の『家族』達。
同胞たる迷い家の中には『下僕』『調教済み』『部下』と称する者達もいるが。ちなみに『下僕』は『げぼく』と読む。
外見は異国の軍人（通称閣下）な姿を取る要塞風迷い家の所は軍隊並みに規律が行き渡った使役鬼で気だるい空気を常に発散させる美形の姿を取る中華風迷い家の所は鬼畜主に甲斐甲斐しく仕え、ののしられると悶え喜ぶ使役鬼だ。

「考えてみれば普通じゃない奴多すぎ……」

お前が言うなと該当同胞に言われそうなことを呟く人間恐怖症な迷い家。

てきぱきと出来上がった食事を大皿に盛り付け居間に運び込む。漂う香ばしい香りに使役鬼達が跳ね上がらんばかりに喜ぶ。

「「「「「「いただきます！！！！」」」」」」

小さな手を合わせて頭を下げると途端に大盛りのおかずに箸が伸びる。

『あるじさまあるじさま！お魚おいしいね！』

『あ、そりぇ、ぼくのぉぉぉ！！』

『あるじさま……これ、にがいぃぃぃ！』

『もぐもぐ。はぐはぐ』

ほっぺに食べかすをつけて食事に夢中になる使役鬼たちの頬を拭いてやっていた迷い家だったが意識の端で少年が目覚めるのが分かり手を止めた。

『あるじさまぁ〜〜？』

ぴたりと動きを止めた迷い家に使役鬼達が揃って首を傾げる。その様は小動物ぽっくてとてつもなく可愛らしい。さすが我が使役鬼たち……いや、今はそんなことを考えているときではなく。

「人間が……」

『人間が？』

鸚鵡返しが余計に可愛いと現実逃避しながら迷い家は口を動かす。

「起きた」

「『……』」

静寂。痛いぐらいの静寂。もはや迷い家も使役鬼も動きを止めてただ互いに見詰め合っていた。

「ぜ、全員、第一級戦闘配置～～～～～～～～～！！！！！」

『きゃぁ～～～～～～～～～～！！にんげんおきたぁ～～～～～～～！！』

思わず先に述べた要塞風迷い家の口調を真似ながら立ち上がった迷い家に使役鬼達はきゃっきゃっと楽しげに転がった。

人間恐怖症の迷い家の使役鬼だとしても人間にたいして恐怖はない。

『にんげんおきたぁ～～～』

『にんげんどんなの？』

『みにいく？』

『いく？』

『いっちゃえ！』

むしろ興味津々であった。

「こらぁ～～～～～！！何怖いこと言っているのあんたたち！！」

今にも特攻していきそうな使役鬼達の首根っこを掴んでは後ろに放り投げるが数が多すぎて追いつかない。

使役鬼達は放り投げられるのが面白いのかわざと捕まるようにしている。証拠に誰一人として部屋を出ておらずきゃーと歓声を上げながら部屋を駆け回るばかりだ。

使役鬼にいいように遊ばれている主。

だが、意識の端できょろきょろと部屋を見渡していた少年が「……声がする」と呟き部屋を出てこちらに向かい始めたのを感じ取り、びくっと身体を震わせた。

く、来る！！こっちに来る！！

「あんた達！！姿、姿を消して！！」

『え～～～～～！！なんで？』

「なんでもいいから早く！！」

『ぶ～～～～～っ！！あるじさまのおうぼ～～～！！』

いっせいに舌を出す使役鬼達の姿がぱっと消え去る。人の気配はあ

るのに人の姿がないのが迷い家。姿を消すのは十八番である。
わたわたしながら迷い家も姿を消そうとして……消せなかった。

「なぜっ！！」

ああ～～～姿が戻れなくなったことを同じか！！

もう、こちらに向かう少年の足音が直に聞こえ始める。

「あの～～誰かいらっしゃいませんか～～～？」

あわわわわわわっ！！

な、なにか、か、かくれる場所～～～～～～～～！！

動揺している間に開きっぱなしの襖からひょっこりと少年の顔がのぞく。

「あの～～すいませ……」

「ひっ！」

驚きで見開いた少年の茶色のくりくりとした瞳と何故だか鍋の蓋を頭にかぶりお玉を抱きしめていた迷い家の涙に濡れた黒曜石のような黒い瞳が重なった。

「あの……」

「（びくっ！）」

奇怪な格好の迷い家に一応声をかける少年だったが迷い家は飛び上がらんばかりに震えると壁にべったりとくっついてプルプルと震える。

「えっと……」

「うっうぅぅぅぅぅぅ！！」

声を押し殺して泣き始めた迷い家。……人間がそんなに怖いのか。もちろん相手が人間恐怖症な迷い家だなんて夢にも思わない少年は当たり前だが泣きしゃくる女の子を慰めようとする。

「泣かないで。怖くないから」

「うぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

涙目で睨みつけられる。

「ま、参ったなぁ……えっとここはきみの家？ぼくを助けてくれたのはきみ？おとうさんとおかあさんは？だれか大人のひといる？」

「ふぇぇぇぇん！」

全く会話にならない。

「えっとなかないで泣かないで！！怖くない。怖くないよ～～～」

「ひ、ひぇぇぇぇぇぇん！」

鍋の蓋をかぶって大泣きする女の子に少年は心底困った。

後編　（前書き）

すいません！予想外に長引いたため、後編がわかれました。終わってません！

後編

生き倒れた少年が鍋の蓋をかぶった人外と出会う、少し前。迷い家が棲家にしている山の裾野に存在する村の一つが珍しい客人にわいていた。

黒髪黒目が多いこの国ではまずお目にかからない長い金髪はきらきらと輝き風に舞う。青い瞳はまるで澄んだ泉を思わせ纏う服は白を基調とした――――ー知る者が見ればそれは上位の聖職者しか纏うことの赦されない法衣であることがわかるだろう――――を纏い街からやってきたであろうに塵一つ付いていない。村の男衆よりも高い背、腰の位置などまったく違う。手も足も長く肌は雪のように白い。村を訪れた異人に見るもの全てが手を止め、魅入られた。それほどまでに美しく華のある空気を持つ青年であった。

全ての視線をいっせいに浴びようが青年は何一つ動揺することもなく歩みを進める。

青年はぼぉーと自分に見とれる村人達ににっこりと笑いかけると男女問わず顔を赤く染めた。

【こんにちわ。少しお話をさせてもらってもよろしいですか？】

「へ？へぇ？」

聞いたこともない言葉を流暢に操りながら話しかけてくる青年に話しかけられたおかみさんは日に焼けた顔を真っ赤に染め、おろおろと手ぬぐいを握り締めた。

青年の声は耳に心地よい低音で歌うように紡がれた言葉は意味が分

からずとも洗礼されており彼の物腰の上品さと合わさり青年の育ちのよさを際たたせた。

「あ、失礼しました」

青年がこの国の言葉に切り替える。その言葉は村人達と変わらぬほど流暢で村人達は益々目を丸くする羽目になった。
万人を魅了する笑みを浮かべながら青年は言葉を紡いだ。

「少々お聞きしたいことがあるのですが……お時間、よろしいですか？」

【遭難者の出ない山、ねぇ……慈悲深い山神がいるからだっていうけど何の見返りもなくそんなことする奴はいないんだよ】

神なら信仰を魔物や悪魔なら生贄や供物を。等価交換、ギブアンドテイク。

人と人ならざる者の間に何もなく利益が生じるわけがない。
純朴に神の善意を信じる村人を愚かとは思わない。裏側を知らないだけだ。無知だとは思うが。
青年は……西の果ての国で上級聖職者として悪魔や魔物払いを法王から赦されたエリート中のエリートはくつりと天使のような顔に悪魔のような笑顔を浮かべ神をただ無邪気に信じる人々を嗤った。
その笑顔は先ほどの人の良さは微塵も感じさせず美しさはそのままに凄みだけが増していた。

【迷える子羊はただ無心に神に縋るだけか。手を差し伸べてくるの

が神でも悪魔でも彼らには大して違いはないのかな？】

青年の視線の先には夕闇に沈もうとしている山神が棲むという山。村の誰もが山神が棲むという山に村の最年長である老婆だけが違うことを言った。耄碌していて会話にならなかったが山に棲む者のことを聞いたときだけ確かな答えが返ってきた。

『……あの、やまにはなぁ～～～迷い家が棲みついているんよ。わしのばあさまが言っとった。やまには迷い家がおるんじゃと』

老婆の言葉を思い出し再び青年はくつりと嗤った。

【迷い家ねぇ……】

この東の国に棲むという魔物……妖怪の一種だと記憶している。害はなくただ迷い人を持て成し、欲を張らなければ富をもたらすという。

何か隠された利益があって人を持て成すのかそれともただ優越感に浸りたいだけの偽善なのか。

そこまで考えているとバサバサと山から黒い翼を持つ鷲が飛んできて青年の肩に止まる。ついついと青年の金髪を啄ばむとそのまま煙のように姿を消し、落ちてきた紺の宝玉を青年が掴む。

宝玉から伝わってくる気配と光景に獲物の痕跡を見つけ青年の足が山へと向かって歩き出した。

【まぁ、獲物の捕獲のついでに便利な家を手に入れるのもいいかもしれないな】

青い瞳がまだ見ぬ獲物を思って楽しげに揺らめいていた。

「「……はっくしょんっ！！！」」

人間が目の前にいる恐怖に顔を引きつらせて泣き続けていた迷い家（頭に鍋の蓋装備）とそれを必死に宥めていた少年はほぼ同時に背筋に走った悪寒と共に盛大にクシャミをしていた。

なんだろう、この、ネットリとまとわり付くような悪寒は。まるで超たちの悪い外道鬼畜に目をつけられたかのような気分に陥りブルリと二人は肩を震わせた。

「あ、えっと大丈夫？さむい？」

「ズッ、ううん。大丈夫……」

普通に受け答えしかけた迷い家は再び壁に張り付く。クシャミと悪寒で涙は引っ込んだようだがじっーーーと睨みつける目は警戒心がありありと見て取れて少年はへにょりと目じりを困ったように下げ、何かを考え込むように黙り込むといきなりその場に正座し決意の篭った視線を向けた。

「自己紹介しましょう！」

……迷い家は数秒、少年が何を言ったのか理解できなかった。

「はっ……？」

「自己紹介です。自己紹介！お互いに何も知らないから怖いんですよ。自己紹介してお互いのことが分かったらきっと怖くないですよ

！」

「え？はぁ？えっと……？」

自分が怖がっているのはそんな理由ではない。決してない。というかなんだその理論は。

「まずは名前。僕は日向といいます。きみは？」

「あ、うん！わたしは迷い……」

迷い家と言おうとして不自然に言葉を途切れさせる。
妖怪だとばらしてもいいのか？
ぐるんぐるんと戸惑いと疑念が渦巻いて言葉が出てこない。だが、
日向は勝手に納得したらしくにぱりと笑う。

「マヨイさんですか。いい名前ですね！」

いえ、本名ではないですどね。君が勝手に勘違いしただけですからね。そもそも迷い家に個別の名前はないですから。しかもこれ、いい名前なのかな？
心の中で突っ込む迷い家。
少年はにこにこと笑いながら迷い家の手を握る。

「ひっ！」

突然の接触に硬直する迷い家の喉から変な声が漏れた。

「マヨイさん。助けてくれてありがとう！」

だけど邪気のない笑顔になんとなく毒気が抜かれて身体から強張りが消えてしまった。

「なんで……あなた家（わたし）の前に倒れていたの？」

「……」

当然の質問に笑顔で凍りつく少年。その顔は異常なほど青ざめていた。気づけばつながれた手も震えている上にものすごく冷たい。

「……そ、れ、は……」

何かを思い出したのか言葉を紡ぐはずの唇はパクパクただ無駄に開閉するだけで一向に意味ある言葉は吐き出さない。
それどころか身体の震えはますます酷くなっていく。

がたがたがたがたがたがたたたたたっ！！

どんな目にあったのだろうか？尋常ではない怯えっぷりであった。
顔面蒼白でただただ震える日向に迷い家は恐怖も忘れて慰めに掛かった。

「もういい！もういいから！落ち着いてぇぇぇぇぇぇぇ！！」

肩をがくがく揺さぶる迷い家にうつろな瞳のまま「あはははは」と壊れた笑いを零す日向。
そんな彼らの騒動を家のあっちこっちから見つめていた使役鬼達は顔を見合わせそして「しゃーねぇーなぁー」と言わんばかりに肩を竦めた。

「お、落ち着いた？」

「あはは……ごめんなさい。ちょっと大分結構なトラウマになっているみたいで……あ・は・は・は……」

「落ち着いた？本当に落ち着いた？笑い声と目がうつろになってきているんだけど！！」

再び乾いた笑いを上げ始めた日向を迷い家は必死に揺さぶる。同胞が見れば「人間にそこまで近寄れて触れれるだなんて！」と目に涙を浮かべられそうな光景だが迷い家からしてみれば怖がる以前にこの少年が心配になってきているだけである。

「あはは……ごめん。本当にゴメン」

「本当に大丈夫？というかなんであんたこんな山の中で生き倒れになんてなったの？」

「いや～～僕にもさっぱり分からなくて。僕は両親が早くに亡くなっていまして、人里離れた場所で一人で暮らしていたんですけど……」

そこで何を思い出したのか再び震え始める。また壊れたかと思ったがどうにか持ち直した日向が深呼吸をして再び語り始めた。

「ある日、僕の元に異人さんが強襲してきたんです」

……異人？強襲？

疑問が顔に出ていたのだろう日向がもう一度「強襲です」と念を押した。

「まず問答無用で家の玄関を吹き飛ばされました」

オマケに相手は不可思議な術を使う異国の術士のようで狼だの鳥だのを嗾けられたと日向は語った。

「……よく、逃げれたわね」

何故に一般人が異国の能力者に強襲されたのか分からないがその相手からよく逃げ切れたものだと感心する迷い家に日向は困ったように頬をかいた。

「それが、僕にもよく分からないんですよね。あの人の容赦ない攻撃に逃げ回ったのは確かなんですけど僕、一度追い詰められてもう駄目だと思ったんです。だけどその後の記憶がなくて、気づいたら見覚えのない森を走っていてこの家を見つけたところで気絶したみたいです」

僕自身もよく分かってなくて……ごめんなさい。とうなだれる日向。

「さ、災難だったわね……わけも分からずそんなんに追い掛け回されて」

話を聞くがきり絶対に出会いたくない人間らしいし、と人間恐怖症の迷い家は頬を引きつらせた。

「えっとまぁ、お茶でも飲んで一息つく？」

茶でも入れて一息つくかと腰を上げかけた迷い家だったが意識の端に引っかかった気配にはっと宙を仰ぐ。

「マヨイさん？」

意識を家の外に向けかけたその時、歪んだ笑みが見え、そして……。迷い家が何か行動を起こすより早く。

どがぁんっっっっ！！！！！！！

盛大な爆発音と共に迷い家が揺れた。

「っう！」

「マヨイさん！」

衝撃によろけた迷い家の身体を日向が抱きかかえ、抱えきれずにその場に二人して座り込んだ。

「一体何が……」

衝撃のせいか家との同調が上手くいかない。周囲が探れないことに迷い家は小さく舌打ちした。

「マヨイさん？どうした……」

「使役鬼！！状況を説明して！」

日向を無視して声を張り上げた迷い家の言葉に待ってましたとばかりに使役鬼達が姿を現す。

「え、あ、えぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

『『『『は～～～～～～～～～～い～～～～～～～～～～～～～～！！！お待たせあるじさま！！』』』』

突然現れたたくさんの使役鬼達に目を白黒させる日向をよそに使役鬼達は楽しくて仕方がないという顔で声をそろえて主に笑顔で答えた。

「全員いる？今の揺れは全員感じていたわね。何が起こったか探ってきて頂戴。無駄に手出しはしないこと、でも可能なら足止めよろしく」

『あるじさま！いってくる！』

『あるじさま、かがみ！かがみ！』

使役鬼の一人が差し出した銅鏡を受け取る。

「んっ。ありがとう。それじゃ行動開始！」

『『『『はい！！』』』』

よい返事と共に再び消えた使役鬼達。日向はきょろきょろと辺りを探すがもちろん姿を見つけることはできない。

「えっと？マヨイさん？」

縋るように目を向ける日向に迷い家は小さくため息をついた。意図せず緊急事態の遭遇でばらすことになるとは……怯えたり暴れたら気絶させると決心しながら迷い家は日向を振り向いた。

「日向」

「は、はい」

「わたし、妖怪なの。種族名　迷い家　つまりこの家は自身よ」

「はっ？」

「ついでに言えば今、この家に不法侵入者が入り込んだわ。暴力も辞さない奴みたいね。一応わたしも迷い家。招いた人間の安全は保障するから安心して」

日向はじっと目の前の自称妖怪の少女を見た。黒い艶やかなおかっぱ頭に仕立ての良い椿柄の着物をきた十歳ぐらいの少女が迷い家？

「……」

「信じられない？まぁ、仕方ないだろうけど……」

「座敷童だと思ってました」

「はぁ？」

「いや、外見が座敷童そのものなのでてっきり座敷童なのだとばか

り……まさか迷い家だとは。というか迷い家って人の姿になれるんですね」

僕知りませんでしたとのほほんと言う日向だったが言っている内容は聞き逃せない。

「え、ちょっと待って。あんたわたしが人間じゃないって気づいていたの？」

「？はい。見ればそれぐらいはわかります」

当たり前のように言っているが普通は見ただけで人間に化けた妖怪を見分けることは難しい。

化けた妖怪を見抜くのはよほど力のある人間かもしくは……。

『あるじさまぁ～～～！かがみ、光ってるよ～～～～！』

ひょっこりと現れた使役鬼がぺしぺしと小さな手で鏡を叩いていた。

慌てて銅鏡を覗き込めば鏡が歪みここではない場所を映し出していた。

鏡に映るのは数匹の使役鬼達。天井の隅にでも隠れてい居るらく鏡の端っこに侵入者らしき姿が上からの角度で映っている。

『こちらせっこうたい～～～！！もくひょうはっけん！！』

『はっけん～～～～～！！』

『ほんぶ応答とうぞ～～～』

緊急事態にも関わらずなんだこのノリノリな使役鬼達の笑顔は。
迷い家は根こそぎ何かが持っていかれた気がした。

『もしも～～～し？ほんぶ？主さま～～～？応答？おうとう～～～
どうぞ～～～？』

「こちら本部、状況説明お願い……」

あ、ノッてあげるんですね。と呟く日向。

『はい！主さま！』

元気のよい返事と共に鏡に映る光景が変わり侵入者の姿をはっきりと映し出した。
その瞬間、日向は青ざめ、迷い家は眉を顰めた。

「……っ！！！！！？？？？？？？○×♪！！」

「異人？」

そこには我が物顔で迷い家の中を闊歩する金髪碧眼の恐ろしく美しい異国の青年の姿があった。

「なんでこんなところに異人がでてくるのよ。ねぇ日向……って」

振り向くと日向の姿がない。きょろきょろと視線をさ迷わせると部屋の隅っこで頭を抱えて震えていた。
その姿はまるでいじめられて丸くなっている犬そのもの。涙目で見上げてくる彼にへたれて耳と縮こまった尻尾が見えた気がして迷い家は思わず目を擦った。

ちょっと可愛いことか思っちゃったじゃないの。人間相手に。
理不尽な怒りを感じる迷い家だったが次に日向の叫んだ言葉に顔色を変えた。
「そ、そいつ……そいつです！！僕の家に強襲かけてきた異人は！！」
「はぁ！！こいつが！！」
『はい。わたしが、です』
鏡から有り得ない声が返事をして迷い家と日向は揃って鏡の方に顔を向ける。
覗き込めば輝かんばりの笑顔で手を振る異人の姿。
「「……」」
なぜ、どうして、使役鬼達は何をして……。
『『『あるじさま～～～つかまった～～～～～！！』』』
青年の使い魔らしき鷲のくちばしに咥えられぶら下がっている己の使役鬼の姿に迷い家はその場に四つんばいになった。
その頭上には暗雲が立ち込めているのを確かに見たと後日、日向は証言した。
『いや～～～可愛らしい使い魔ですねぇ～～』

『きゃ～～～くすぐったぃ～～～～～』

きゃっきゃら楽しげに笑う囚われの使役鬼。……まぁ、元気そうだ無駄に元気そうだ。ちくしょうめ。

荒んだ目になる迷い家。怒涛の展開に正直付いていけない日向。腹の内を読ませない微笑みを浮かべる異人の青年。何が楽しいのかきゃっきゃっと笑う使役鬼達。

事態は混迷から混沌へと急速に移行しつつあった。

後編　（後書き）

申し訳ございません（土下座）前中後編と分けていましたが後編が予想外に延びてしまったため後編に数字がついてしまいました。（後編1だけで前編中編の文字数に匹敵するなんて予想外）
なるべく2で完結出来るように全力を尽くします。本当に申し訳ございませんでした！

完結編（前書き）

お待たせしました！！ようやく完結です！！

完結編

『主様、ということは貴女が迷い家ですか』

混沌の中で最初に口火を切ったのは異邦の侵入者。暗雲を背負い四つんばいになっていた迷い家が顔を上げ、きつい目で鏡を睨みつけた。

「……だったら何？招かれざるお客にしかも家（わたし）をぶっ壊すような真似をしでかした人間にたいしてわたし、腸が煮えくり返りそうなんだけど」

オマケに使役鬼まで人質にとられて異人に対する印象は人間であることを除いても底辺を突き破っている。

恐怖よりも怒りを感じるぐらいには迷い家は怒っていたし何一つひくつもりはなかった。

何がなんでもお帰り願うと心に決める迷い家。

鏡の中の異人は睨みつけてくる迷い家をしげしげと眺めそして一言。

『……子供、なんですね』

ぴきっと迷い家の額に青筋が浮かぶ。口元がひくひくと危険な感じに引きつるのを間近に見て迷い家の機嫌が急下降していることに気づいておろおろとうろたえる日向。

『……お子様かぁ……どうせ人型になるのならもう少し育った姿でもいいのに……』

欲望タダ漏れな発言に迷い家の目が完全に据わり隣にいた日向は悲

鳴を飲み込んだ。

空気読んで～～～～～～！！

魂の叫びを上げる日向。

生まれて数百年の迷い家に対してたかだか２０数年生きただけの人間がお子様扱い。

迷い家の背中に暗雲ではない黒い靄が見えてもう日向は涙目であった。

『まぁ、お子様でも便利な家が手に入るからいいか』

そう言って笑う異人に完全に切れた迷い家は荒みきった目で睨みつける。もう、人間怖いなんてすっ飛ばして怒りに支配されている。

この男、絶対にぼこぼこにしてやる！！

「あの……マヨイさん？落ち着いて」

「便利な家？あんたわたしを使役下に置こうというの？はっ！たかだか２０数年生きただけの人間がよくぞほざいた！」

「あぁぁぁぁ……喧嘩売っちゃった……」

「ふふっ。実力とは生きた年数とは関係はありませんよ？要はとちらが強いか弱いか、それだけです」

「こっちも買う気満々ですか……」

ずーんと暗雲を背負う日向。この面子の中では確実に心労を背負い込む性格であった。

「大体、あんたなんでただの人間のこの子を狙うのよ！！」

『人間？その子供は妖狼と人間との混血ですよ？』

「……へっ？僕？」

あっさりと暴露された己の知らない出生に日向が固まる。迷い家は眉を顰める。

「混血？だけどこの子からは一切の妖力を感じないわよ」

でたらめ言ってんじゃないわよねと疑惑の眼差しになる迷い家に異人は飄々とした空気を崩すことがない。

『その子供は妖怪としての自分と人間としての自分が完全に分離させられているんですよ。誰がやったのか見事な術だ。覚醒していない状態は人間そのものなのだから気づかない……まぁ』

ここで意味深に言葉を切る。流し目で迷い家をみる表情は確実に馬鹿にしていた。

『わたしはすぐに気づきましたけどね』

自慢げでもなく当たり前のように言い切るのが更に迷い家の癪にさわった。

この異人、遠まわしに迷い家を「格下」扱いした。

迷い家が満面の笑顔になる。

笑っている。笑っているのにどうしてこんなに怖いのだろうか……。

己が人間ではなく半妖だったことを知らされたショックよりも妖怪と異人がかもし出す空気の方が怖くてたまらない日向であった。

「泣いて這い蹲らせ謝るまでいたぶる」

『あはははは。妄言ですね。貴女から「使い魔にしてください」と言わせて見せましょう』

陰険陰湿なのに笑顔笑顔笑顔、ひたすら笑顔で応酬。笑顔なのに言っていることが怖い上に目が両者笑っていない。

うそだ。僕が半分妖怪って絶対にうそだ。だって今、目茶苦茶この人達が怖い。この場にいたくない。逃げ出したい。

部屋の隅でプルプルと震える日向をよそに迷い家は指で首を切るまねをしてから親指を下に向けた。

「ぶっ潰す」

異人も戦意に爛々と目を輝かせながら異国の姫君にダンスを申し込むように優雅に一礼をした。形のよい唇から零れる聞き心地の良い声がまるで愛を請う様に迷い家を迎え撃つ。

『返り討ちにしてさしあげますよ』

それが、戦いの合図。

同調が上手くいかず、視界は人と同じなれど鏡を通じての攻撃ならできる。こちらの不調を奴は知らない。
そして、迷い家が抱える絶対的な不利に気づかないうちにケリをつける！！
軽く息を整え、そして迷い家の攻撃は開始された。

ブンと揺れ、床から突き出してくる板を異人はヒョイと避ける。着地地点を狙ったかのように廊下に穴が開くがそれも慌てつ騒がず壁を支えにして避ける。

「おやおや……お粗末ですね」

言い終わるよりも前にその言葉に怒ったかのように攻撃が悪化する。どこからともなく飛んでくる日常品をひょいひょいと避けながら異人は楽しげに唇を歪ませた。

きっと今頃、あの迷い家は怒りに我を忘れ、子供の方はおろおろしているのだろう。

その光景が容易に思い浮かんできてくっと喉の奥で笑いながら異人は再びあいた穴を軽やかに飛び越えた。

「～～～～～～～～～っっっっっっっっっっ！！腹が立つ腹が立つは～～～ら～～～た～～～つ～～～～～！！！！！！」

握りこぶしをぶんぶんと振り回し鏡の中で軽やかにこちらの攻撃を避ける異人に対する怒りをあらわにしていた。

「ま、マヨイさん……」

「大人しく落とし穴にはまりなさいよ！！ああ、もう、喰らえ、タワシ攻撃。ちくちく痛みにのた打ち回るといいわ！！」

「あ、あの、僕の話を……」

あ～～～ははっ！とまるで悪の総大将のような高笑いを上げる迷い家の袖を日向がびびりながらも引くが振り向きもせずに振り払われる。

「あ、あの、あの！」

「ん？なに？あ、復讐方法の提案？いいよ。受け付けるわ。どんなのがいい？」

「いえ、だからですね……」

背後に何か気配を感じた。それが何か判断するよりも早く日向は迷い家に飛びつくなり横に倒れた。

「ちょっ！！」

数秒前まで二人がいた場所に高速で何かが飛び込んでくる。それと同時に部屋の中に満ちる力が一気に濃厚になり、迷い家の顔に緊張感が走る。

「……使い魔」

恐らく、異人の方に意識を持っていかれている内に放たれたのだろう。彼の口ぶりから殺されることはないだろうが捕まれば即座にあの野郎の使い魔に堕とされる。

そんなのはゴメンである。

「マヨイさん。大丈夫ですか」

「平気よ。それより……どうしようかしらね。あの鳥、あの異人の使い魔よ」

大型の鷲の姿をした使い魔は鋭いなき声を発しつつこちらを見ている。逃がす気がないのか少し動いただけで警告するようななき声が耳をつく。

意識を集中させる。周囲にある物が迷い家の意思通りに浮かび上がる。

「いけ」

小さな命令に従い周囲を浮かんでいた物が高速で使い魔に襲い掛かる。使い魔が甲高いなき声を発しながら翼を大きく動かし風を起こした。

一瞬、ぶれていた本体との同調が戻る。意外なほど近くまでいる異人の気配に息を飲んだのが悪かったのか使い魔が起こした突風に身体を持っていかれる。

「っう！」

ぶっ飛ばされる。重なった同調もすぐに外れてしまう。

「マヨイさん！！」

腕をつかまれる感触。そして意外なほど少ない衝撃と背後に感じる温かさにはっと振りかえればそこには迷い家を庇って壁に激突した日向の姿が。

「日向！」

慌てて伸ばそうとした手は背後から掴んで止められる。

「大人しくしてください」

鏡越しではなく生身で聞こえてきた声に迷い家は唇を噛む。ゆっくりと振り返れば使い魔を従わせる異人の姿。

「あんたの勝ちってわけ？」

「抵抗など無意味、ですよ？第一貴方たち迷い家は一度招いた人間を己の意思で追い出すことが出来ないのでしょ？」

知っていやがった。

迷い家の本能ともいえる制約を。

ぎりっと奥歯が鳴る。だめだあまりにも不利な条件が揃いすぎていた。それにこの男自身、強い。

異人の目がピクリとも動かない日向に向けられる。

「気絶をしてくれているとは幸運ですね」

そう言う異人に力が集まり始める。

『古の盟約の元……』

異国の言葉で紡がれる呪文と共に力は溢れる、このままじゃ駄目だ。二人揃ってこいつの使い魔にされる。そんなのは嫌なのに。

邪魔しないと。その思いだけで迷い家が異人に飛びついたのと金色の瞳が開かれたのは同時であった。

ぶわっと静電気のように妖力が場に満ちる。あっちこっちに潜んでいた使役鬼たちがガタガタ震える。

先ほどまでこの場に満ちていた異人の力が払拭されていくのを迷い家は目の当たりにした。

息をするのすら辛い力の爆発の中心で日向がゆらりと立ち上がりゆっくりと顔を上げた彼の瞳は鮮やかな金色に染まっていた。その瞳があまりにも綺麗で、迷い家はその瞳から目が離せない。

「日向……」

名を零した迷い家を金色の瞳が写す。彼からは想像も付かない無表情に近い顔に感情らしきものが浮かんだ。

「……」

日向の口元が微かに動く。何か喋ったようだが小さ過ぎてこちらに

まで届かない。日向の金色の瞳が迷い家と彼女をつかめる異人を見る。
獣のように変貌した瞳に剣呑な光が宿ったのを見て、ゾクリと背筋が凍った。悪寒の意味を考えるより早く、日向が爆発音を立てながらこちらに突進してきた。

「なっ！」

とんでもない跳躍力で距離をつめた日向は獣のような雄叫びを上げつつ異人に拳を振り上げる。咄嗟に防御の術を発動させようとした異人だったが迷い家を掴む腕が弱る。
その一瞬を見逃さず日向は迷い家の首根っこを掴むとそのまま自分の背後に放り投げた。

「にゃぁぁぁっぁぁぁ！！！！！」

猫のような悲鳴と共に転がる迷い家をよそに日向は更に異人に攻撃を加える。ころころ転がりながら迷い家は「あれは誰だぁぁぁぁぁぁ！！」と内心絶叫していた。

目つきも目の色も行動も全部が全部今まで見てきた日向と違いすぎるだろ！！

日向の突然の変貌に驚く間もなく異人対日向の戦いに突入していた。
激しい爆音、埃、飛び散る家財に削げ落ちる壁、折れる柱、両者一切の手加減を忘れて戦いは激しさを増していた。

「この！だからこれが出る前に使役下に置きたかったんですけどね！」

「ぐぁぁぁぁぁ！！」

いつの間にか狼の腕に変化していた日向の腕が振りかぶられる。それを異人が数種の術を同時に発動させて迎撃する。
容赦なく攻撃、反撃するものだから被害は拡大するほかない。

家(わたし)の中だということも忘れてな！！！

ぶちり、と迷い家の中で何かが飛び千切れた。胸の奥から湧き上がってくる怒りは先ほど感じていたものを軽く凌駕していた。

プルプルと震える拳に呼応するように迷い家の黒髪が意思を持つかのように緩やかにうねる。髪が目に見えて伸びていく。丸みを帯びた子供らしい赤い顔は女性の柔らかさへ、小さな手足はしなやかな白魚のごとき。

「いい加減に……」

ずっと感じていた不調が不意に消え去る。せき止められていた力が一気に迷い家の中に満ちた。

「いい加減にしろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

叫んだ声は信じられないほどの美声。だがドスのきいたその怒鳴り声に日向異人両人が思わず動きを止めた。

彼らの視線の先にいたのは着物姿の小生意気な子供ではなく腰まである黒髪を背中に流し、鮮やかな椿の描かれた着物を身に纏った恐ろしいまでの美貌を持った妙齢の美女。

不調を乗り越え、本来の姿に戻った迷い家であった。

キツメのだが目を奪われずにはいられない美女は燃え盛る炎のような怒りを背負いながらもいや、怒りを抱えているからこそ尚、美しかった。その美しさに思わず見惚れてしまった日向と異人を睨みつける。

「あんたら……全員……」

迷い家は低く低く這うように呻いた。

「黙れ！！！」

血反吐を吐くような迷い家の叫びと共に彼らの頭上に瓦礫が飛んでくいく。

「「っ！！」」

迷い家に気を取られていた二人は瓦礫に反応するのが遅れ、そして……。

こ〜〜〜〜〜〜ん！

小気味いい音が二つ同時に辺りに鳴り響いた。

「「……ぐっ！！」」

どさ、どさ。

怒り心頭の迷い家の前で男達は情けなくも後頭部にタンコブを作って目を回した。

さて、それからどうなったかと言うと……。

「「なんで」」

語尾は「ですか」「よ」と違ったが同時に同じせりふを口にした二人の内一人は酷く残念そうに、もう一人は信じられないといわんばかり頭を掻き毟っていた。

「なんであんたここに居座ってんのよ！！出て行きなさい！！」

「なんで子供の姿に戻っているんですか？大人の姿になってください」

使役鬼達によって急速に修復されていく家の一室で我が物顔で茶をすすりつつ自分勝手なことを言うのは家を壊した張本人の一人である異人。

「知らないわよ！！気づいたらまたこの姿に戻っちゃったんだから！！」

寛ぐ異人の前で仁王立ちしているのは再び不調に陥り子供の姿に逆戻りした迷い家。

「マヨイさん～～～。瓦礫の撤去終わりましたよ～～～」

気を失ったら元の子犬な人格に戻り自主的に修復の手伝いを始めて、笑顔で迷い家に駆け寄る日向。

怒り心頭した迷い家が暴れまくる二人を力技で黙らせた日から何故だか異人も日向も迷い家に居座り、出て行く気配がない。

異人曰く、「大人姿に惚れました。必ず手に入れます。なので大人の姿になってください」で日向曰く、「大変なご迷惑をかけてしまったのですからお詫びをしなければ気がすみません！！」だそうで。どちらも梃子でも動かない。

「いいからさっさと出て行け！！」

怒鳴っても狂犬と子犬はどこ吹く風。出ていきゃしない。

人間嫌いな迷い家の所にはただ今、異人と半妖が住み着いています。

完結編（後書き）

終わりました……。書いていたら長くなるなる。おまけに上手くかけないし、一応納得のいく終わりに持っていくまで何度書き直したか……。

拙い文章ですが暇つぶしに楽しんでいただけたのなら嬉しいです！！

マヨイガ　こぼれ話

森の中に突如として現れる要塞。その入り口には門番のちまっこい使い鬼が軍服をぴしりと着こなし直立不動で門を護っていた。

右端の使い鬼はまだ日が浅いのかやけに服が大きく、軍帽で顔が半分隠れてしまっているのがなんとも可愛らしく映る。

そんなマヨイガの主は予想を裏切らず軍人の格好をした体格のよい青年の姿をしている。性格も生真面目な軍人そのもので彼に招かれた人間はもてなしではなく軍事訓練を受けていると仲間内ではもっぱらの通説であった。

そんな軍人マヨイガ……通称「北のマヨイガ」はこれまた似合いの作戦司令室のような自室に珍しい客人を招いていた。

「相変わらずかたくるしい趣味だね〜〜」

へらへらと笑いながら排他的な空気をかもし出しながら人の部屋のソファーに優雅に寝転がる同胞に北のマヨイガは眉を顰めた。

「相変わらず軟弱だな。西の」

「あはははは。君に比べれば誰だって軟弱だよ」

ダルダルと手を振りながら答えたのは通称「西のマヨイガ」と呼ばれるマヨイガの青年だった。

「怠け者で滅多に出歩かない貴様がわざわざ足を運ぶとは一体どう

いう風の吹き回しだ？」

北のマヨイガの言葉に西のマヨイガの瞳がキラキラとか輝きだす。ただしソファーには寝転がったまま顔だけあげて待ってましたと語りだす。

このマヨイガ、面倒くさがりだが人の噂や面白いことは大好きという物凄く矛盾かつややこしい人種である。

「そうそう。聞いてよ。どうやら東のが面白いことになっているみたいだよ」

「東のが？」

「東のマヨイガ」こと「人間恐怖症のマヨイガ」の顔を思い浮かべる。己の存在意義を己で否定しているような同胞に何度、克服のための訓練を申し入れただろうか？何故だか全てにおいて青い顔をして断られてしまったが。

生きた年月としてはあちらの方が上なのだが意識的にはどうにも手のかかる妹のようにみてしまう。

そんな存在が件の同胞である。

彼女に一体何があったのだろうか？首をひねる北のマヨイガに西のマヨイガは得意そうに（でもぐたーとしている）取っておきの情報を披露した。

「どうやら東のってば人間を住まわせているらしいよ」

「……ガゼだろ」

速攻で否定する北のマヨイガ。だが、それを見越した西のマヨイガは「ちちちっ」と妙に上手い舌打ちで指を振りながら懐から一枚の紙を取り出す。

「写真機か？人間用では妖怪には仕えないだろ」

「ああ、これは妖怪用。人間かぶれの天狗が改良に改良を重ねて作り上げた力作だって。マージャンに勝って巻き上げたら「かえして〜〜〜」って大泣いてたからよほど自信作」

「……返してやれ」

「向こうが負けた金、全額払うんだったら考えてもいいよ〜〜」

もう知らんとばかりに頭をふる北のマヨイガ。この件に関しては今はどうにもできぬと放置を決め、差し出された写真を手に取る。

覗き込んだ写真には。

イイ笑みで記憶より大分小さい東のマヨイガらしき子供の頬を引っ張り無理やり笑顔にしている同胞たる南のマヨイガ。その隣で胡散臭そうな笑みを浮かべつつ暴れている東のマヨイガの襟を掴んでいる金髪の異国の男。そしてそれらを止めようとしたのだろうが異人によって顔をつかまれ物理的に遠ざけられている少年。

その様子は一言で表せば。

「混沌だな」

「だね！」

正反対のマヨイガの意見が一致した瞬間であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2814w/

マヨイガ　子犬、拾いました。

2011年12月30日01時51分発行